

保護者 様

仁科台中学校長 興 幸雄

仁科台中学校の家庭学習について

寒冷の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。日頃は本校の教育活動にご理解とご協力をいただきありがとうございます。

先月の学年・学級PTAや学校評価のアンケートで家庭学習について多くのご意見をいただきました。年度当初に保護者の皆様に十分なご説明ができないままスタートしてしまったことが原因と思われる。大変申し訳ありませんでした。改めて保護者の皆様に家庭学習についてお知らせし、本校の家庭学習の方向についてご理解いただくとともに、ご協力をお願いいたします。

1 昨年度までの家庭学習

国語の白文帳1ページ、数学の提出ノート1ページ、英語の提出ノート1ページを毎日の課題として与え、それを教科担任が点検をし、提出率を成績に加味していました。

社会・理科については、日々の課題としては特になく、定期テスト前にテスト範囲とともに、学習の仕方やポイントをアドバイスしていました。

2 検討をした内容

本校だけでなく多くの学校で家庭学習についての議論がなされ、ただマスやページを埋めるだけで、提出することだけが目的になり、各教科の求める力につながっていないという結論に達し、これまでの一律の課題を与えるものとは異なる方法を模索することにしました。

3 本年度の本校の方向

「自律した学習者になる」という学校目標を受け、自分に必要な学習を自分で進められるようになってほしいと願い、本校の家庭学習について以下のような指導を進めてきました。

- (1) 仁科台中学校は「宿題がないと聞いた」というご意見をいただきました。これにつきましては、学校側の説明不足、指導不足と言えると反省しております。各教科がその日の学習内容を踏まえ、教科書の練習問題や問題集のページを指定して、学習内容の定着が図れるように指示を出して、自己採点をさせたり、次の時間に答え合わせやその内容を確認するドリルなどを行ったりしています。

教科によっては毎日指示を出すことが難しい単元などもありますので、指示がない日もあります。

- (2) 上記以外については特に指示を出さず、教科書やワークブックなどを使ってその日の学習を復習したり、次の時間の予習をしたりするような学習を紹介しています。教科担任から指示がない日は家庭学習をしなくていい日ではなく、自分で考えて学習するようになってほしいと考えます。大北地域の中学校では、「自学ノート」「自主学习」などの名称で生徒に課している学校もあります。
- (3) 単元テストや定期テスト前の準備は勿論、返却後の見直しについてもその必要性和大切さを指導しています。テストのために勉強するのではなく、日々の学習の成果をテストによって点検するということを日頃から指導をしています。テストで間違えた(×になった)ところはしっかり定着ができなかったところなので、やり直しや学び直しが必要になります。間違える(×になる)問題は個々違うので、それぞれがどう取り組むかを考えないといけません。
- (4) これまでは「関心・意欲・態度」の評価において、提出ノートの提出率や授業中の発言回数などを成績に加味することが行われてきましたが、来年度からの新学習指導要領では、次のように示されています。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価に際しては、単に継続的な行動や積極的な発言を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するということではなく、各教科等の「主体的に取り組む態度」に係る観点の趣旨に照らして、知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について思考錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意志的な側面を評価することが重要である。

4 本校の実態

(1) 各教科で購入している副教材など

各教科では、教科書以外に下のような副教材（問題集やプリントなど）を購入し、授業での学習内容の定着やその確認のために活用をしています。

授業中に指示をして取りませたり、持ち帰らせて家庭学習で取りませたりしています。

| 教科 | 1 年 生 | 2 年 生 | 3 年 生 |
|-----|--|--|---|
| 国 語 | 新漢字教室 2 1 3 6 字 光村の国語のワーク 単元プリント「積み上げ」 | 光村の国語のワーク 単元プリント「積み上げ」 国語の新研究（入試対策） | 光村の国語のワーク 単元プリント「積み上げ」 整理と対策 国語（入試対策） |
| 社 会 | 社会の自主学習 地理世界 社会の自主学習 歴史 単元プリント積み上げ地理 単元プリント積み上げ歴史 | 社会の自主学習 地理日本 社会の自主学習 歴史 単元プリント積み上げ地理 単元プリント積み上げ歴史 社会の新研究（入試対策） | 社会の自主学習 公民 単元プリント積み上げ公民 社会の新研究（入試対策） |
| 数 学 | 数学の問題ノート 単元プリント積み上げ | 数学の問題ノート 単元プリント積み上げ 数学の新研究（入試対策） | 数学の問題ノート 単元プリント積み上げ 数学の新研究（入試対策） |
| 理 科 | 新ワーク 単元プリント確認から発展へ | 新ワーク 単元プリント確認から発展へ 整理と対策 理科（入試対策） | 新ワーク 単元プリント確認から発展へ 整理と対策 理科（入試対策） |
| 英 語 | English PENMANSHIP Smile English 単元プリント 週のまとめ | English PENMANSHIP Smile English 単元プリント 週のまとめ スタディープ ロジェクト（入試対策） | English PENMANSHIP Smile English 単元プリント 週のまとめ スタディープ ロジェクト（入試対策） |

上記の他、長期休業中には課題帳やプリント類などを準備し、範囲を示して取りませています。

(2) 指示を出してきた家庭学習

各教科で指示を出してきた家庭学習については次の表の通りです。学級の授業進度等により若干の違いはありますが、基本的に教科書や購入した問題集やプリント等から課題を与えています。

| 教科 | ○与えている課題の内容 |
|----|--|
| 国語 | ①「国語のワーク」・入試問題集で予習・復習をする。 ②「新漢字練習」で新出漢字などの練習をする。 ③単元ごとの振り返り（ノートに記述して提出。振り返りを書かせない単元もあります。） |
| 社会 | ①問題集「社会科の自主学習」を各自の計画で進める。 ②ノートに教科書の内容や授業で学んだことをまとめる。 ③毎時間ではないが、課題（プリント）を出しています。 |
| 数学 | ①教科書の問題を指定する ②「数学の問題ノート」のページを指定する |
| 理科 | ①理科の自主学習を計画的に進める ②単元プリント（授業中に実施し、終わらなかった場合） ③自然事象の観察や応用問題の課題を与える場合もあります。 |
| 英語 | ○授業の予習（新出単語練習、教科書を読むなど）・復習 ○ワーク（授業の進度に合わせてページを指示） ○プリント問題（不定期） |

指示を出した課題について、提出日を設定して確認したり、テスト前やテスト後にまとめて確認をしたりしていましたが、一部確認をしていないものもありました。

そこで、課題として生徒に与えた場合は、やったかやらないかだけでなく、取り組みの内容についても確認するよう、職員間で申し合わせをしました。

教科担任によって独自の課題を出したり、確認方法についても差異があったりすることがないように、教科会で情報交換をし、生徒や保護者が不安を抱かないようにすることも確認をしました。

5 今後の取り組み

- (1) 保護者の皆様に本校の取り組みをしっかりとお伝えすることができていなかったことが大きな反省点です。そこで、参観日などで保護者の皆様にお話をしたり、学年通信やホームページなどで情報を発信したりして、ご理解やご協力をいただけるようにして参ります。また、ご家庭でも家庭学習について確認していただくことを検討しています。
- (2) 与えた課題への取り組み状況については適宜確認をする機会を設けるとともに、定期テストだけでなく、ドリルや単元テストなどでその定着状況を職員・生徒が把握できるようにしてまいります。
- (3) 「分からない」「できない」部分は、個人によって差異がありますので、全体指導でつまづきを修正することはもちろんですが、個別指導をすると同時に、生徒自身も友達や先生に聞いて、解決していくことができるようアドバイスもしてまいります。

6 家庭学習に関する参考資料

(1) 全国における先進校の取り組み

元東京都千代田区立麹町中学校長・工藤勇一氏の著書『学校の「当たり前」をやめた。』（時事通信社）より

全国津々浦々、どの学校でも宿題が出されています。その目的は何かと問われれば、多くの学校関係者や保護者は、「子どもの学力を高めること」「学習習慣を付けること」と答えると思います。

しかし、本当にその目的は達成されているのでしょうか。自宅で宿題に取り組む子どもたちの実態を思い浮かべてみましょう。

例えば、数学の計算問題が20問出されていたとします。勉強がよくできる子は、すでに解ける問題から、あっという間に片づけてしまうでしょう。一方で、苦手な子や分からない子は、解ける問題だけを解き、解けない問題はそのままにして翌日、提出することが多いのです。

自ら学習に向かう力を付けて、学力を高めていくには、自分が「分からない」問題を「分かる」ようにするプロセスが必要ですが、多くの宿題においては、そのことが欠けています。すでに分かっている生徒にとっては、宿題は無駄な作業で、分からない生徒にとっては重荷になっているように思います。

宿題を出すのであれば教師は、「分からないところをやっておいで」と声掛けしなければいけないはずですが、「分からない」ことが「分かる」ようになるためには、2つの作業が必要です。一つは分からないことを聞いたり、調べたりすること。2つ目は繰り返すことで定着させることです。

この定着させる方法については、さまざまなものがあります。書き写したり、読んだり、集中して聞いたり、何かと何かを関連付けて覚えたりなどの方法がありますが、何より大切なことは、自分の特性に合った方法を見つけることです。そして、その適した繰り返しの方法こそが、その人の生涯を支えるスキルとなっていくのです。

小学生の頃、「漢字の書き取りテストで間違えたら、1文字につき20回書いて提出すること」などと宿題を出され、一つひとつ、漢字を確認するのではなく、「作業」を早く終わらせるべく、「へん」だけを先に20個書き、その後に「つくり」を20個埋めていくなんて「作業」をした人もいるでしょう。そのとき、「作業」を淡々とこなす際の脳は、ほぼ思考停止状態で、早く終わればいいなど、「やらされている」気持ちで一杯になっていたのでしょうか。

以前、将棋棋士の藤井聡太7段が、担任教員に「授業をきちんと聞いているのに、なぜ宿題をやる必要があるのですか？」と聞いたことが、話題になりました。その後、担任が宿題の意義を説明し、藤井7段は納得して宿題を出すようになったそうですが、彼の主張はとてつもない射ているように思います。

日々、将棋の世界で自らの技能を磨き、追求し続けている彼はすでに十分に自律した人です。自分が何をすべきかという優先順位が分かっている彼にとって、その宿題に費やす時間がもったいなかったのだと思います。

これも以前、伺った話ですが、フィンランドでは、教員も子どもも「Miksi (なぜ) ?」という言葉が口癖になっているそうです。疑問に思ったことはすぐに口に出し、互いが対話をしながら、もし、不合理な状況があれば解決・改善しようとする。そうした習慣が身に付いているからこそ、改善が進み、労働生産性が高まるのではないのでしょうか。

私が麴町中学校の校長に赴任した当時、宿題のあまりの多さに驚きました。ただし、これは多くの中学校でも同じです。生徒たちは宿題をこなすことに汲々としていて、かわいそうなほどでした。かねてから宿題の存在意義に疑問を持っていた私は、赴任2年目に、まず、夏休みの宿題をゼロにする方針を打ち出しました。その後、段階的に宿題をなくしていき、4年目を迎える頃に「全廃」に踏み切りました。

当初、私が宿題全廃の方針を示したことに、一部には疑問を持ち、抵抗感を示す教員もいました。当然のことだと思います。私はこう説明しました。

「批判や誤解を恐れずに言えば、教員が宿題を出すのは子どもたちの『関心・意欲・態度』を測り、評価（通知表）の資料とするためではないですか。もっと私たちは専門性を発揮しないといけない」と。

この問題の背景には、一つの流れがあります。学校関係者以外には、あまり知られていないかもしれませんが、そもそも「評価」が、かつての相対評価から絶対評価へと変わっており、その中で、「関心・意欲・態度」という観点別評価を行うようになっていきます。

通知表には、学習の理解度・到達度だけでなく、学習に対する「関心・意欲・態度」が示されています。この「関心・意欲・態度」は、目に見えない尺度だけに、評価するのが難しいものです。そのため、宿題の提出量や、授業中の挙手回数などをカウントし、それを評価に活用していることは珍しくありません。本来であれば、そうした数字に頼らず、子どもの成長や可能性を読み取るのが、専門職たる教員の役割です。

学校で宿題を出されて子どもが勉強機に向かっているならば、勉強の習慣が付くと、保護者は安心するに違いありません。その思いは分かります。しかし、本当に大切なのは、勉強時間よりも勉強の中身です。自律的に学ぶ経験を積まないと、決して工夫して仕事ができる人にはなりません。

もっと言えば、私は、学校ですっかりと勉強をして、家では、好きな音楽を聴いたり、本を読んだり、スポーツをしたり、あるいは、ぼんやりと思索する時間の方がよほど有意義だと思っています。そうした時間の中で、自分自身の内面や思考が整理され、大切なことに気付いたり、思い付いたりすることは、たくさんあるに違いありません。

宿題を全廃したことで、最も喜んだのは、受験を控えた3年生の生徒たちでした。それは「負担が減って楽になったから」ではありません。自分にとって重要ではない非効率な作業から解放されたからです。自分の時間を、自分の考えで使えることの大切さについて、生徒たちは、敏感に感じ取っていたのだと思います。もし、それでも宿題を出したい先生がいるのなら、生徒たちに「すでに十分にできる問題は、やっちゃダメだよ。よく分からない問題に頑張ってトライしてくるんだよ」と伝えるべきだと思います。

繰り返しになりますが、学習は「できない」問題を「できる」ようにするプロセスでないと、意味がないからです。

何より重要なのは、学校の中で学習すべき内容を理解できるようにすることです。そして、「やらされる学習」ではなく、生徒たちが主体的に学ぼうとする仕組みを整えることです。宿題が子どもから自律的に学ぶ姿勢を奪わないようにしなければなりません。

(2) 長野県の方向 教育指導時報 12月号

長野県教育委員会学びの改革支援課課長 曾根原好彦先生の投稿「提出ノート」

若い頃、中学校担任としての学級運営目標に「学級全員提出ノート100%」などと盛り込んでいました。3点セットと呼ばれる漢字（白文帳）、数学、英語の1ページ提出ノートが生徒の基礎学力向上につながると思っていました。

しかしながら、「テスト前は自分で計画した勉強をしたいのに、提出ノートに時間を割かなければならない」「テストが終わった日や長期休業の提出ノートはマスを埋めるだけ」等の生徒の声が聞こえてきて、提出ノートは生徒の学力向上に寄与するのか疑問に思うようになりました。しかし、他の先生方に聞くと、「学習習慣を身につけるためにも提出ノートは大切」と言われます。

そんな折、「秘密のケンミン SHOW」という番組で、白文帳が取り上げられました。番組ゲストの1人が、「長野県の子はかわいそう！」と発言し、衝撃を受けました。また、高校時代の友人から、「中3の息子は数学が得意で、いつも100点近い点数を取るのに通知表は4。懇談会で担任に聞いたら、「提出ノートをあまり出さないで5にはならない」と言われた。息子に注意すると「自分のペースで学習して理解しているし、毎日ノートを出す必要はない」と答える。どうしたらよいか」と相談を受けました。これらのことが重なり、「学習習慣の形成に寄与するのは本当か。高校へ入学すると、3点セットが無くなって喜び、予習・復習をしない生徒が多いと高校の先生から聞く」「評定につなげる総括的評価に提出率を加えることは正しいのか」「もしかして、先生の指示通り提出させることに満足感を得ていただけではないか」と疑問に思い、学級運営目標等に盛り込むことをやめました。指導主事となったある時、匿名の保護者から県教委へ手紙が届きました。

長野県内の公立の中学校では、毎日漢字の書き取り（白文帳）、数学、英語の書き取りなる宿題が、土日祝日、果てはテストの前日・当日、長期休業、要するにほぼ毎日やることになっています。いつからこんな事になってしまったのでしょうか。全国的に見ても長野県だけみたいですが。中学で行われている宿題（3点セット）は、学習ではなく作業です。（中略）ただの作業のために、貴重な時間を毎日1時間以上も無駄にしているのです。中学生の学習の基本は、予習、学校の授業、復習だと思います。大切な、予習、復習の時間が削られているのです。特にまじめな生徒は、先生から嫌われたくないと思い、必死で取り組んでいます。必死で取り組んでいる生徒に対して先生方は、何を返しているのでしょうか。提出率が何%などという、学力と全く関係ないことを言って、生徒を縛りつけているだけです。3点セットで学力が上がっているというデータがあるのなら見せていただきたいものです。（後略）

この手紙を受け取った年度の全国学力・学習状況調査の漢字の読み書きの結果を調べました。すると、正答率は全国平均を下回っていました。

広島県教育委員会に勤めた時、広島の指導主事に長野県の提出ノートについて伝え、どう思うのか聞きました。下記のように言われました。

- ・提出ノートは何のために出すのですか。出したか出さないかではなく、生徒に確かな学力がついたかどうか重要ですね。
- ・提出ノートをチェックする時間は、授業の空き時間ですか。授業準備の時間はどうするのですか。空き時間に授業準備をするのではないですか。
- ・教科の関心・意欲・態度は、提出率で評価できるのですか。

7年前、県教委でも「3点セットの提出ノートからの脱却」を図ろうと、家庭学習研究校を指定し、様々に取り組みました。今はもう「3点セットを出しなさい」と生徒に指導している学校は少ないと思います。生徒が「自律して学ぶ力」「自ら学習を調整する力」を身に付けるために、家庭学習を工夫して実践している学校があります。この取組が広がり、「アクティブ・ラーナー」を育む学校が増えるよう情報を発信してまいります。

(3) School-post 高校受験ナビより https://school-post.com/hint/teikitest_feedback/

分析と約束で成績を伸ばす。定期テストの振り返り（復習）方法

定期テストがようやく終わってほっとひと安心……。と思いきや、今度は答案が返ってきて、親子ともども、またまた落ち着かない日々がやってきます。そこで、今回は「定期テストの振り返り」。ありがちな親子のバトルを回避しながら、次のテストの得点を伸ばすためのコツをご紹介します。

<テストの結果は怒っても変わらない>

試験が終わってから何を言っても、テストの結果は変わりません。誰がどう考えたって、当たり前のことです。でも、頭ではわかっているのに、ついつい感情的になってしまうもの。声を荒げたり口調がキツくなったりするのも、お子さんの将来を大切に思うからこそ。「子どものために思って」という愛情の表れですし、その親心はよくわかります。でも、その親心、お子さんに伝わっていますか？

「自分も中学生の頃はテストの点数が悪かった」という親御さん。

意外と我が子の成績に対して感情的になりがちです。お子さんの気持ちを理解できるかと思いきや、「自分のし

た苦勞を子どもにはさせたくない」という思いから、かえって強い口調になってしまいがち。

「そんなことないです。自分の学生時代は成績が良かった」という親御さん。

自分が優秀であった分だけ、お子さんの悪い結果に我慢がならないようです。幸か不幸か、親御さんは親御さん、お子さんはお子さんなのです。

親が怒鳴ろうが机を叩こうが定規で引っぱたこうが、子どものやる気は上がりません。統計があるわけではありませんが、経験上、これは断言できます。大切なことは、終わったテストの結果を次回に活かすこと。そのためには上手に振り返りを行う必要があるのです。

テスト返却後にお子さんが答案を持ってきたら、まずは“聴くこと”に全力を注いでください。“話すこと”はそれからです。「うんうん」「なるほど」「そうだったんだね」「たしかに」「その通りだね」等、あいづちを打ちながら、お子さんが”その結果をどう受け止めているか”を引き出してください。「子どもが話している最中についつい口を挟んでしまう」という場合は、口を閉じて舌の先を嚙んでおくと、文字通り歯止めがききますよ。

＜成績を伸ばす「振り返り」は分析である＞

成績を伸ばしているお子さんは、テスト結果のとらえ方が上手です。反面、テスト結果を見てそのままポイ、という子は「喉元過ぎれば熱さを忘れる」そのままに、次のテストも似たような結果になります。結果に対して“分析”を行うことで、初めて次回の結果を改善できるのです。

ただ単に「良い点だった」「悪い結果だった」というのはただの“感想”です。

一歩踏み込んで、

「どこが良かったか・何が悪かったか」

「どこをどう勉強したのがうまくいったか・何に気を付けたのが成功だったか」

「何をしておくべきだったか・どう注意しておくべきだったか」

このように細かく掘り下げて考えるのが“分析”です。親子で会話を通じて行うことをお勧めします。

まずは“良かった点”を取り上げましょう。“悪かった点”はそれからです。何かしら良い面を見つけてほめてあげてください。「よし、やるぞ」という気になれば、悪い面についても克服しようというポジティブな気持ちが起こります。先に悪い面をあれこれ言われても、お子さんは気持ちが縮こまったり心を閉ざしたりして、“聴く耳”を持ってません。

＜「振り返り」は未来の自分との約束で締める＞

振り返りを行ったら、次回の目標を設定します。でも、ここで要注意。「目標 = 願望」ではありません。“具体的に何をすればいいか”がはっきりしないのでは、目標を達成できませんし、そもそも目標を立てる意味がありません。

「達成するために何をすればいいかわからない」「とにかく頑張る」というように、行動が曖昧だとどうもいきません。「こんな点を取れたらいいな」なんて軽い気持ちで高い目標点を定めても、本気ではありませんから、クリアできなくても悔しいとも何とも思いません。

目標とは“未来の自分との約束”です。

友達との約束は守ることが大前提ですよね。誰も破るつもりで約束はしません。目標もまったく同じで、達成することが前提です。そのためにも、“具体的に何をすればいいか”とセットで目標を立てる必要があります。

テストで点を取れていないとき、その主な原因は次の3つです。

- 1 【ケアレスミス】テスト前日までは正解1できていたのに、本番でうっかりミスをした
- 2 【練習不足】解き方はわかっていたのに、正解できなかった
- 3 【想定外】勉強していなかったところが出た

1～3の順で解決しやすいものです。そこで、この順に沿って、「この原因を解決したらあと何点取れたか」という計算をしてみましょう。“たれば”大いに結構です。「ほんのちょっとした努力であと10点も取れた」ということもよくあります。実際の答案用紙と問題を見ながら、親子で一緒に考えてみるのもおすすめです。

こうして積み上げた点数が、次回の目標です。実際の問題やミスから組み立てたので、“具体的に何をすればいいか”がはっきりします。意欲も湧いてきます。

親御さんの目から見てみると、「こんな低い目標でいいの？」と思うこともあるでしょう。

しかし、まずはお子さんが自分で立てた目標であることが大切です。心理学的にも、誰かから与えられた動機（外発的動機）よりも自分の心の内側から出てくる動機（内発的動機）の方が強いと言われていています。もちろん、会話の流れの中でお子さんが目標点数を上げるのはあります。

7 まとめ

今回保護者の皆様から寄せられた多くの声で、学校としても改めて「家庭学習」について検討する良い機会となりました。学校としての考えをお伝えしましたが、ご不明な点などございましたら学校にお聞かせいただき、更に仁科台中学校の家庭学習がよりよいものとなりますよう、検討を重ねてまいりたいと考えます。

しかし、実際に学習をするのは生徒たちです。教師と保護者の間でのみ議論を進め、それを子どもたちに押しつけても、目指す「自律した学習」に近づくことは難しいと思います。

生徒会組織の中に学年運営委員会が存在しますので、今後はそこで職員と生徒間でも家庭学習などについての議論を進めることも行っていきたいと考えます。下に長野市立東部中学校の取り組みを紹介いたします。

ご家庭におきましても、家庭学習を話題の一つにさせていただき、学校・保護者・生徒の三者で家庭学習の在り方を考え、取り組んでいけたらと考えております。よろしく願いいたします。

もうひとつ紹介したいのが「YELLOW 義塾」という取り組みだ。2年生の学年カラーである黄色にちなんで名づけられたという。

和学や本気学が学校から与えられた環境だとすれば、YELLOW 義塾は真逆。各クラスのルーム長・副ルーム長で組織する「ルーム長会」や、各クラスから選ばれる「教科主任」と呼ばれる生徒たちが中心となって、テストの予想問題を作る。テスト期間になると昼休みに YELLOW 義塾を開講し、集まった生徒が予想問題に取り組める。

2年6組の副ルーム長を務めるSRさんは、ルーム長会の一員として YELLOW 義塾を運営している。予想問題を作り始めるのは出題範囲が分かるテストの3週間前から。「自分たちで問題を作るからこそ意味がある」と話してくれた。

「どれくらいの問題数なら集中してやれるかを考えて、みんなが『難しいよね』と話していた範囲を中心に問題を絞っています。先生には分からない、生徒の気持ちで問題を作ることが大切だと思っています」

テストが公正に運営されるよう、予想問題を作る際には先生からのアドバイスを一切受けない。

「問題を作って先生に見せたときに『これが予想問題か……。この範囲は本番では出さないようにしよう』なんて思われたら大変なので。先生が問題を見られるとしたら、配布前にコピーをお願いするときくらいです」

YELLOW 義塾においては、先生は雑用係でしかないようだ。

しかし「問題を考える」ことは、「与えられた問題を解く」こと以上に難しいのではないかとも思える。自身の勉強に向き合わなければならず、ただでさえ忙しいはずのテスト期間に、YELLOW 義塾を運営することは負担にならないのだろうか。

「最初は『ちょっと面倒くさいな』と感じていました。でも問題を作るために既存の問題集をいろいろと見て、考えているうちに、何よりも自分自身のためになっていると気づいたんです。『ここはこの前の授業で出た!』と思い出して、問題を作りながら復習をしている感じです。今は、この役割があることをラッキーだと思っています」

Sさんは「みんなで成績を上げていくためには、問題作りにもいろいろな人が関わったほうが良い」と話す。実際に周囲の生徒を巻き込み、みんなで予想問題を作る取り組みを企画しているという。

みんなで変えていくのは、勉強だけではない。最近ではテレビの番組名にちなんだ「ヒルナゴデス」という場所も生まれた。テスト期間以外の昼休みにみんなで集まり、一芸の披露やYouTube 動画などを流して和んでもらうという取り組みだ。

「勉強だけではなく、学校をみんなで楽しんで、自然と集まりたくなるような場所にしていきたいです」

